

香港／鄭志剛 (Adrian Cheng)

——新たな価値創出に挑む財閥後継者——

久末亮一

●新世界発展グループの若き後継者

香港の域内経済は、土地本位ともいえるシステムであり、なかでも不動産開発の市場は、数社の大手財閥が実質的に支配している。「新世界発展」(ニューワールド・デヴェロップメント)はその典型で、間違いなく四大財閥の一つである。

同社は、広東出身の鄭裕彤(1925~2016年)が、事業を拡大するなかで成長した。鄭一族は、祖業の大手貴金属・宝飾品店チェーン「周大福」とは別に、コングロマリットの「新世界発展」を保有し、香港と中国本土を軸に、不動産投資・開発・管理、ホテル、建設、公共交通、通信、百貨店、高速道路、水道、電力など、各種事業を展開している。

この後継者となるのが、創業者の孫で現在37歳の鄭志剛(Adrian Cheng)である。12歳から米国に留学し、ハーバード大学を卒業。長年にわたって日本語も学んでおり、京都に1年間遊学した親日家でもある。外資系投資銀行で経験を積んだ後、2007年に家業に参加し、「新世界発展」の副会長兼社長をはじめ、グループ各社の役員を務める。

●芸術への情熱、事業への応用

その名声を高めているのは、趣味を超えた芸術への情熱であり、それを事業に応用して、新しい価値創出を試みていることである。英国王立芸術学院、テート美術館、メトロポリタン美術館、ポンピドゥー・センター、中国中央美術学院などの理事・委員をつとめる一方で、2010年には非営利の芸術プラットフォーム「K11 Art Foundation」を創設し、香港を軸とした大中華圏の芸術振興に本格的・積極的な役割をはたしている。

彼は芸術的要素を事業にも取り入れ、香港や上海のショッピングモール「K11」は、芸術・文化センスを融合した「ショッピング・ミュージアム」というコンセプトで高い人気を得ている。同プロジェクトは、他に中国本土6カ所でも進行中である。住宅開発でも、

芸術性やクラフトマンシップの高い設備・設計を導入している。その継続的姿勢は、単なる企業イメージ向上の小道具ではなく、芸術への深い情熱と造詣によるものとして高い評価を獲得しており、他社との差別化・競争力を高めながら、新しい価値創出に成功しつつある。

著作権の関係により、この写真は掲載できません

鄭志剛氏。2013年4月、インタビュー前にオフィスにて撮影(写真提供:アフロ)

●受け継いだもの、成すべき課題

この創造性と根気の良さは、祖父に似たのかもしれない。1970~80年代に開発されたニューワールド・センターやコンベンション&エキジビション・センターといった同社のランドマークは、オフィス、ホテル、サービスアパート、国際会議場、ショッピングスペースを融合した、当時では革新的な複合開発の先駆であった。その先見性と実行力が、現在の基礎となっている。

三代目の鄭志剛は、これから経営者として試練を迎える。これまでに発揮した創造的才覚を、広範囲・多岐にわたるグループ全体の経営でも具現化するには、確かな経営資源の選択と集中、細部まで遺漏のないマネジメント体制の確立が必須となる。その上で、既存の資産やビジネスモデルに安住するのではなく、新しい経営パラダイムへの移行、さらなる価値創出に成功してこそ、祖父や父親を越えるだけでなく、従来型の華人系財閥を越えた経営者として、社会に認められるであろう。これからの正念場を迎えるとともに、その成長が楽しみな人物である。

(ひさすえ りょういち／アジア経済研究所 企業・産業研究グループ)